

4

茨城大学 4年 村上 由衣

環

-樹木葬による循環的葬儀場-



環 ～樹木葬による循環的葬儀場～

茨城大学4年環境デザイン研究室 19T5063L 村上由衣

*コンセプト

「弔う」とはもともと「訪う」という表記がなされていた。葬式では暗い雰囲気が漂い、その場にいる全員が故人を思い出す。そんな中、思い出すことは決して暗いものだけではない。穏やかで楽しかった日常、家族団欒の時。そんな心地よい思い出を共有する場であってほしい。自然と一体化するような緑豊かな葬儀場であることで、安らいだ気持ちで故人を送り出し、また故人もゆったりと自然に帰れる空間。都会に出た人も、墓参りとして、地元を訪れ、故郷の自然豊かな環境に、故人との記憶に帰る。そんな帰属意識を揺さぶる樹木葬による葬儀場・墓地空間。

*設計計画

本計画は、対象敷地に樹木葬議場として、墓地と斎場を設計するものである。樹木葬とは墓地の石碑の代わりに樹木を埋める墓形態で、基本的に永代供養であるため費用が抑えられ、継承、管理など残されたものたち負担が軽くなる。さらにシンボルが生きた木であるため、自然に帰れるといった心境の理由や、緑が生まれ、エコであること、散骨などとは違い、木が残るため、墓として墓参りができるなど。故人にも遺族にも効果がある。秋田県の少子高齢化や無縁墓、若者の県外への流出、高齢者が行う墓の管理などの問題点を解決してくれるのが樹木葬である。また、墓として手を加えることで里山化し、現在の荒れた印象を変えていく。構造はRCであるが、テラスや回遊用通路の屋根は、間引いた木を利用する。

*対象敷地

秋田県秋田市外旭川にある平和記念公園、天徳寺墓地公園のある山の裏側、現在田畑がある平野から山にかけてを対象敷地とする。山の南側にある天徳寺墓地公園は、近隣のこども園、小学生の遠足やお散歩などに利用されるほど、アクティブな空間で、墓地という空間において明るく前向きな環境である。しかし対象敷地である場所は公園とは少し離れた位置にあるため、整備がされておらず、荒れた印象を受ける。



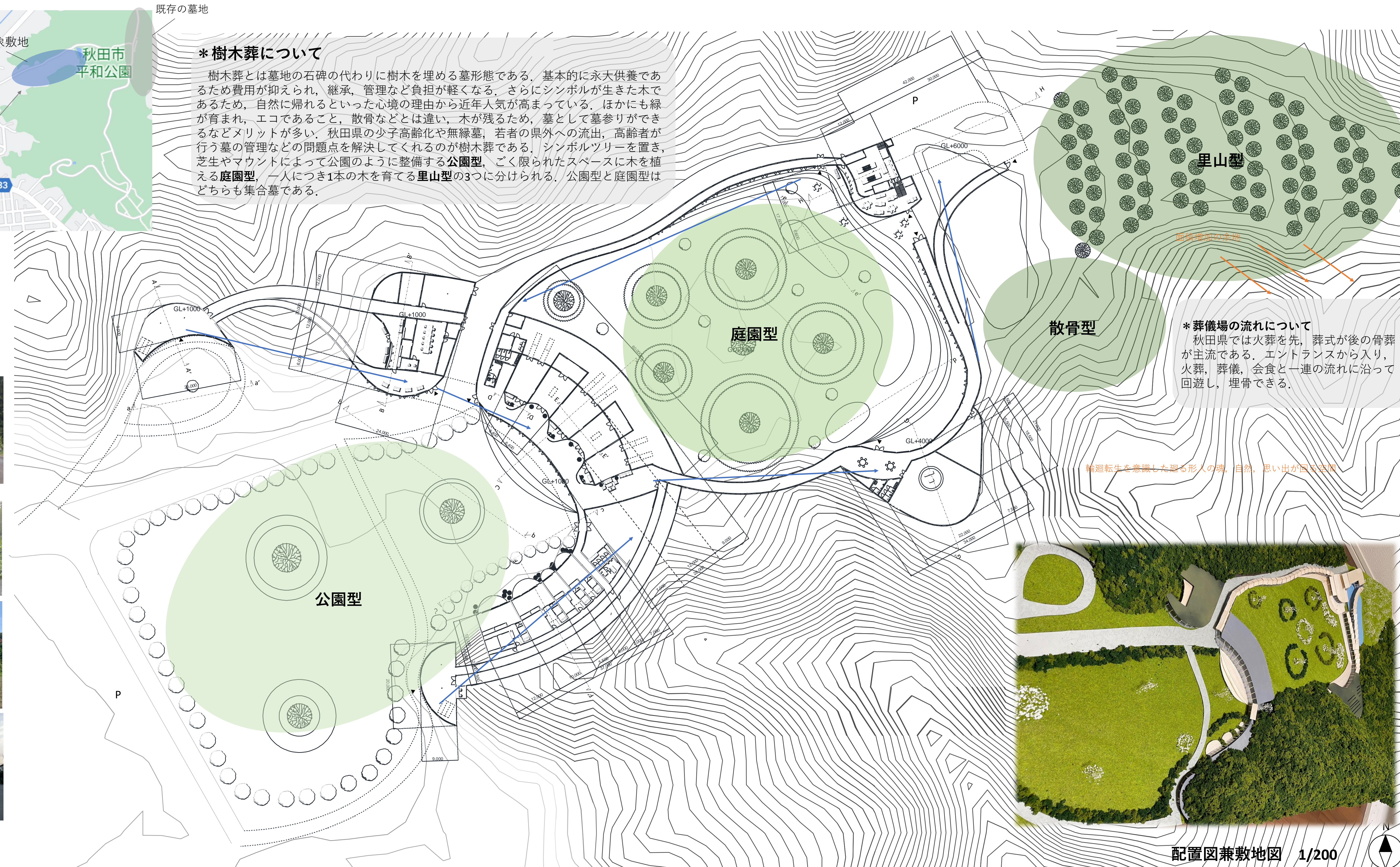
既存の墓地

*樹木葬について

樹木葬とは墓地の石碑の代わりに樹木を埋める墓形態である。基本的に永代供養であるため費用が抑えられ、継承、管理など負担が軽くなる。さらにシンボルが生きた木であるため、自然に帰れるといった心境の理由から近年人気が高まっている。ほかにも緑が生まれ、エコであること、散骨などとは違い、木が残るため、墓として墓参りができるなどメリットが多い。秋田県の少子高齢化や無縁墓、若者の県外への流出、高齢者が行う墓の管理などの問題点を解決してくれるのが樹木葬である。シンボルツリーを置き、芝生やマウンドによって公園のように整備する公園型、ごく限られたスペースに木を植える庭園型、一人につき1本の木を育てる里山型の3つに分けられる。公園型と庭園型はどちらも集合墓である。

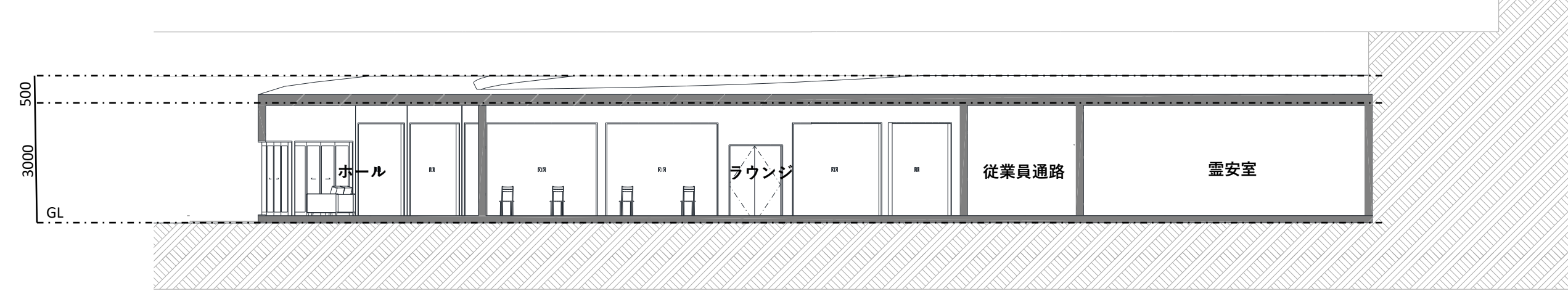
*対象敷地の様子

現在は平地には畑が広がっている。山の木や草は伸び放題である。

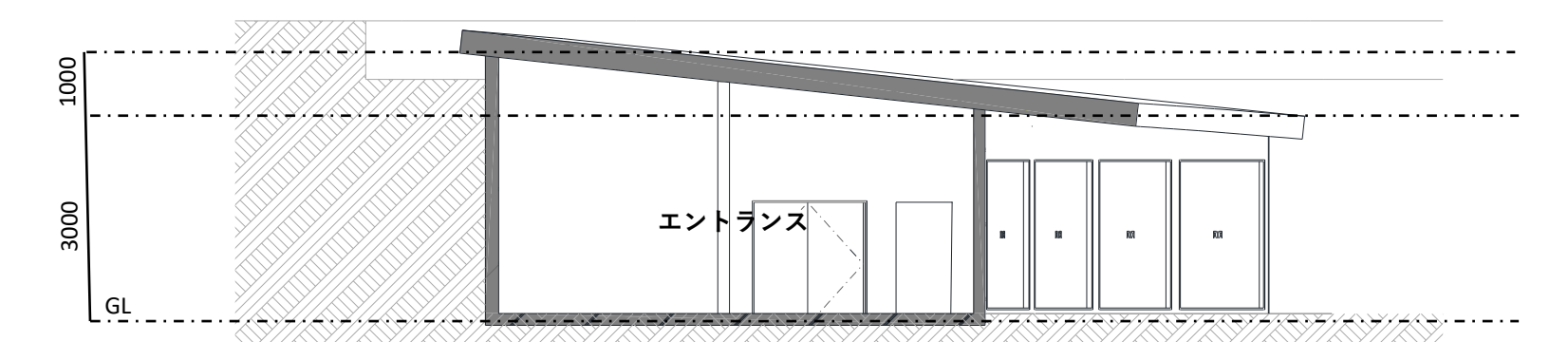


***葬儀場の流れについて**
秋田県では火葬を先、葬式が後の骨葬が主流である。エントランスから入り、火葬、葬儀、会食と一連の流れに沿って回遊し、埋骨できる。

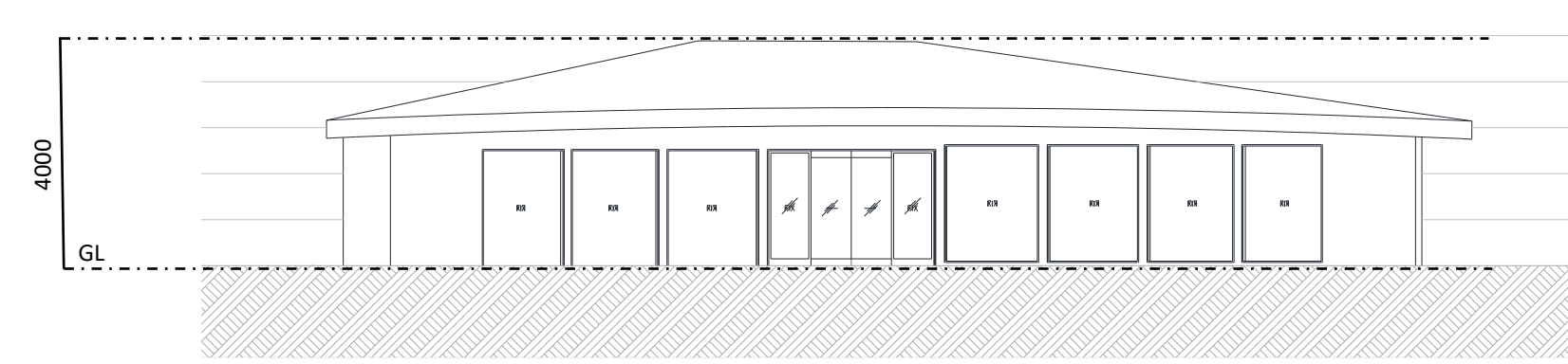
エントランス～受付



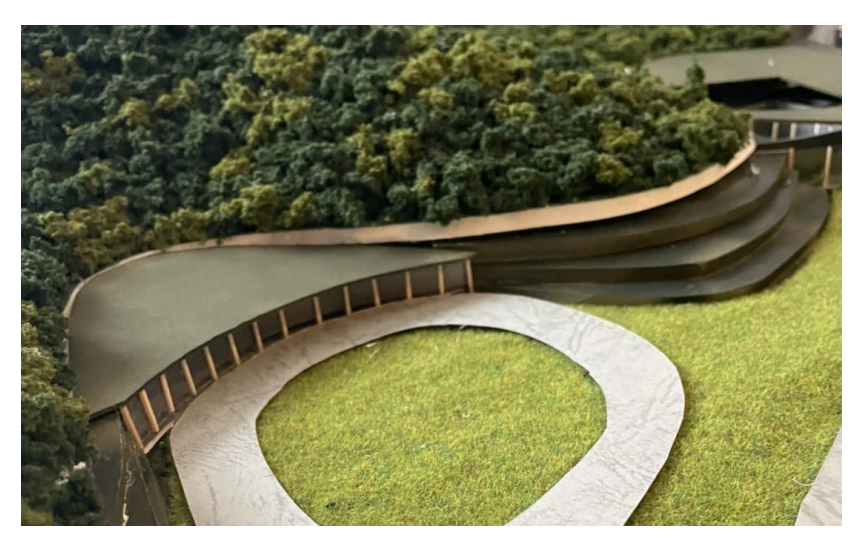
BB'断面図 1/200



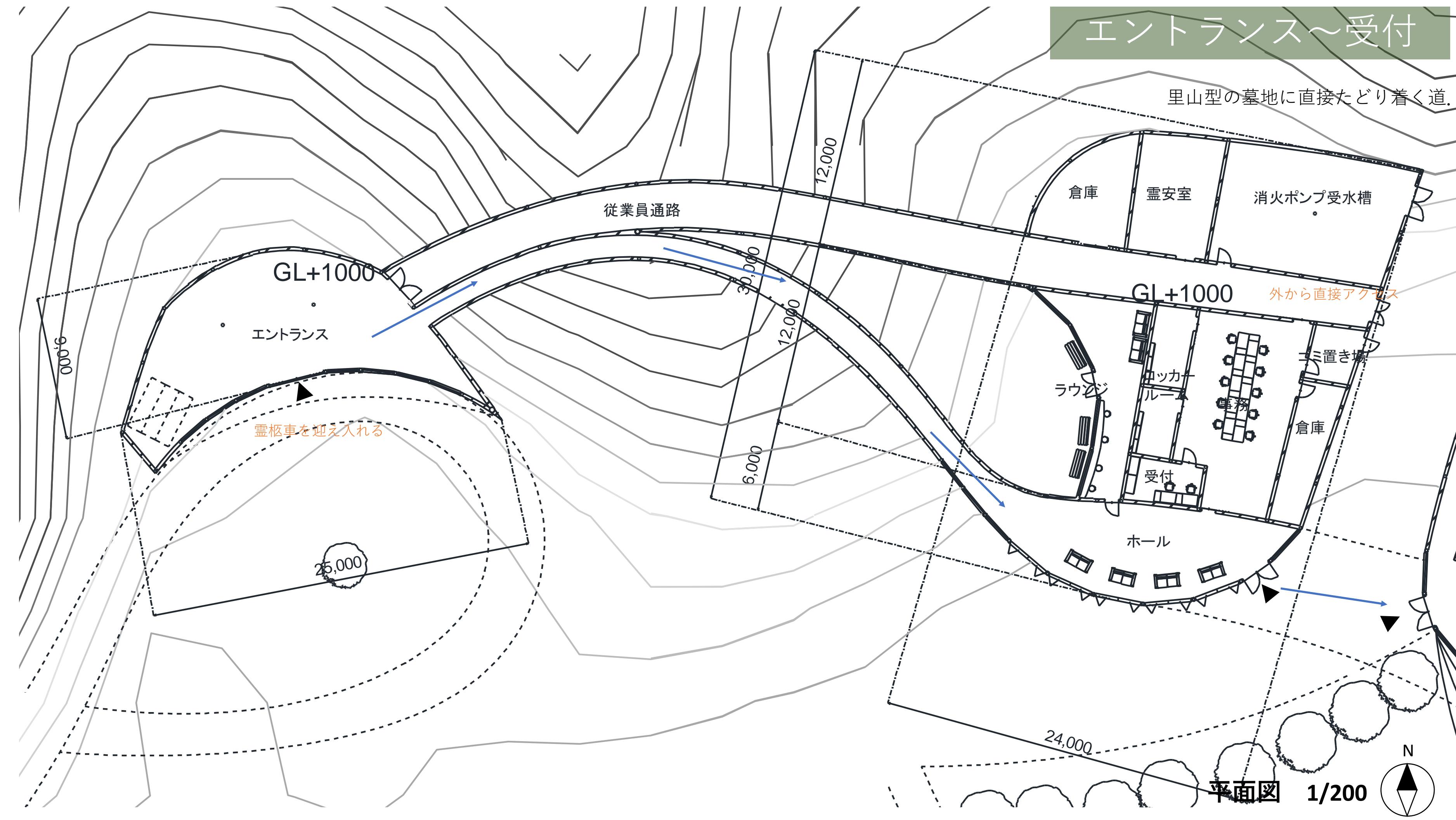
AA'断面図 1/200



aa'立面図 1/200

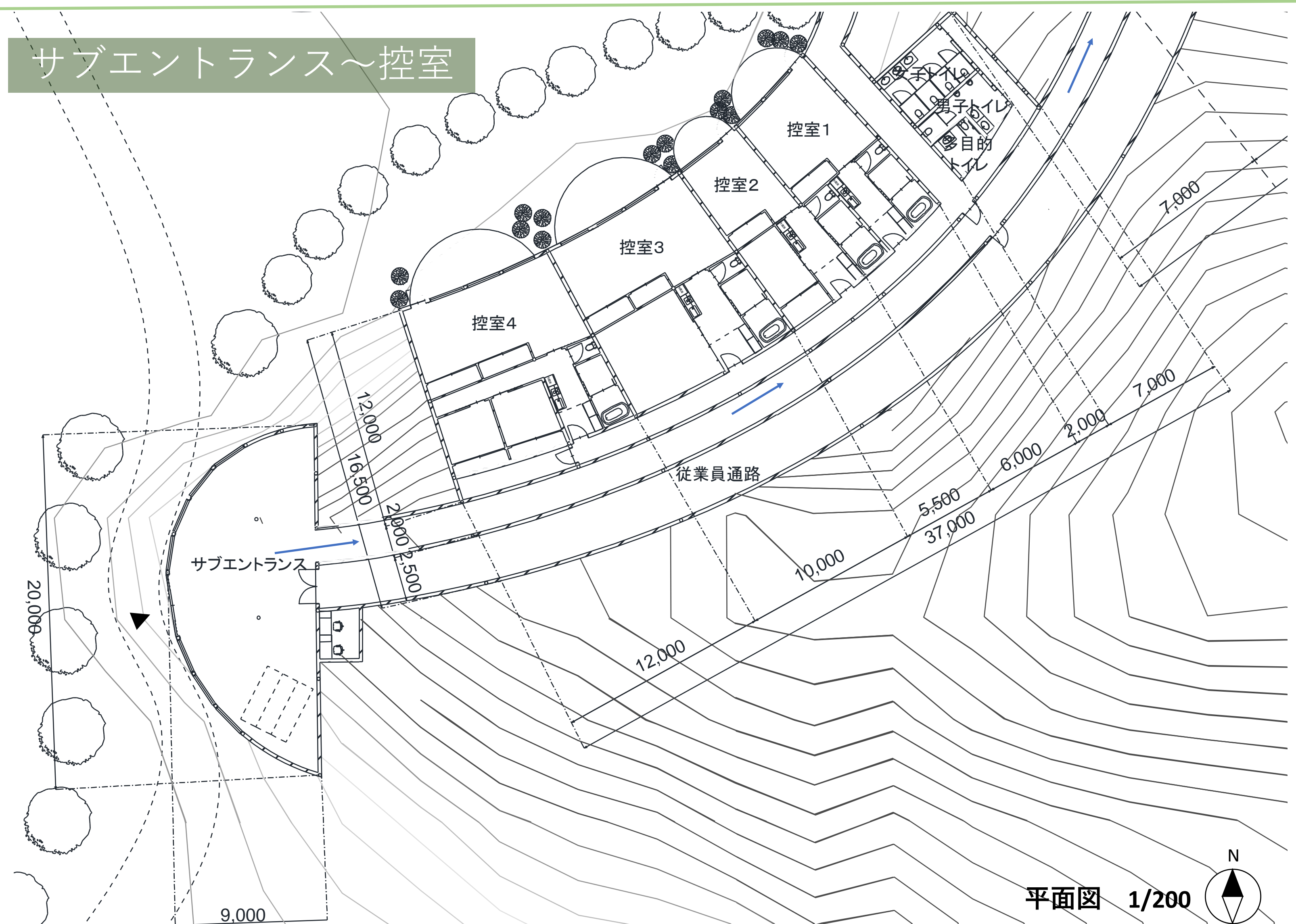


エントランスからホールにかけては山に沈むような設計になっている。故人自然に帰るのを一緒に大地に入り見送る。従業員とは通路を分け、対面しないように。自然に入り、暗いトンネルを進むことで心を落ち着け、火葬の準備をする。庭のような小さなスペースの山。一人、少人数で故人を偲ぶ。暗いトンネルを抜けたら明るく光が入るホールへ。

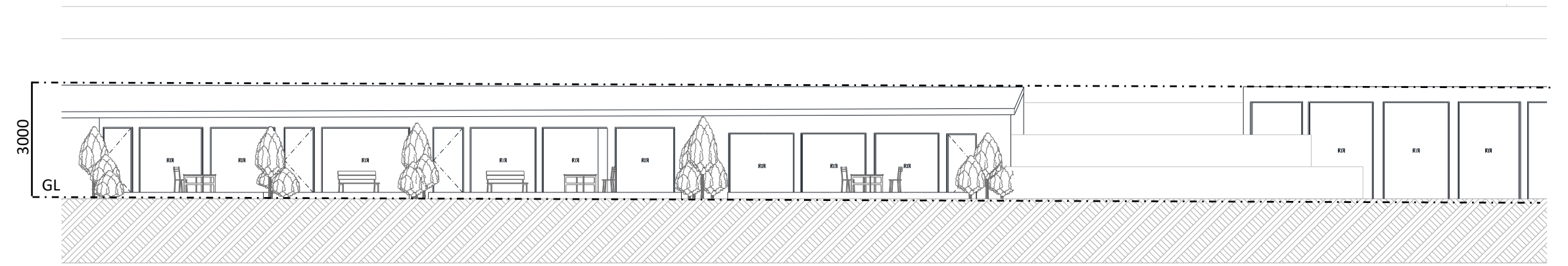


平面図 1/200

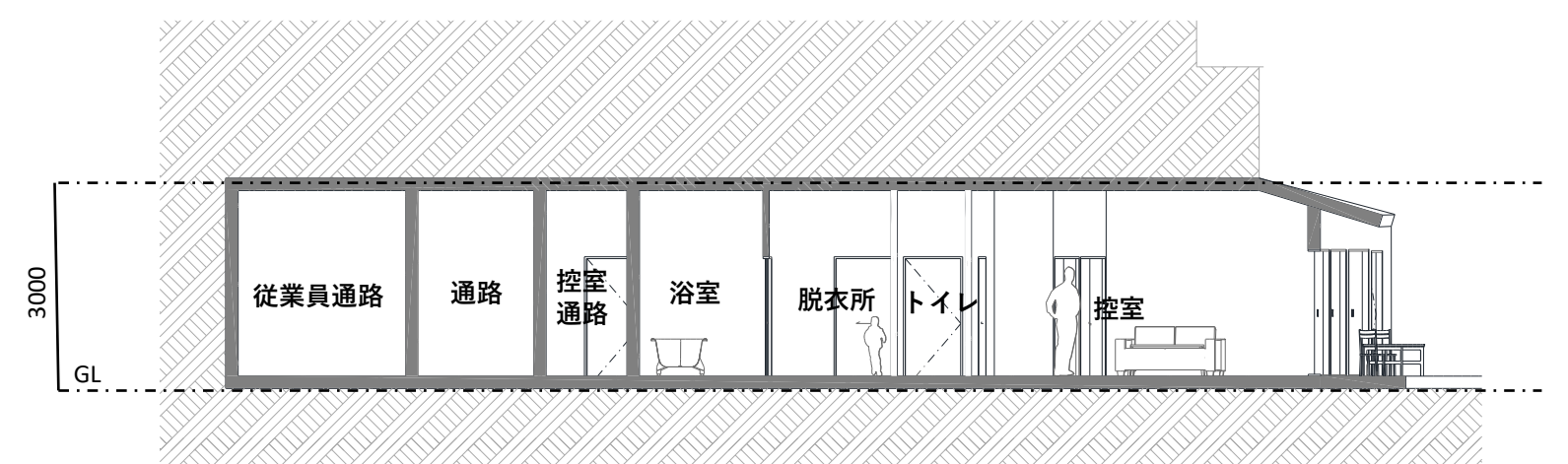
サブエントランス～控室



平面図 1/200



cc'立面図 1/200

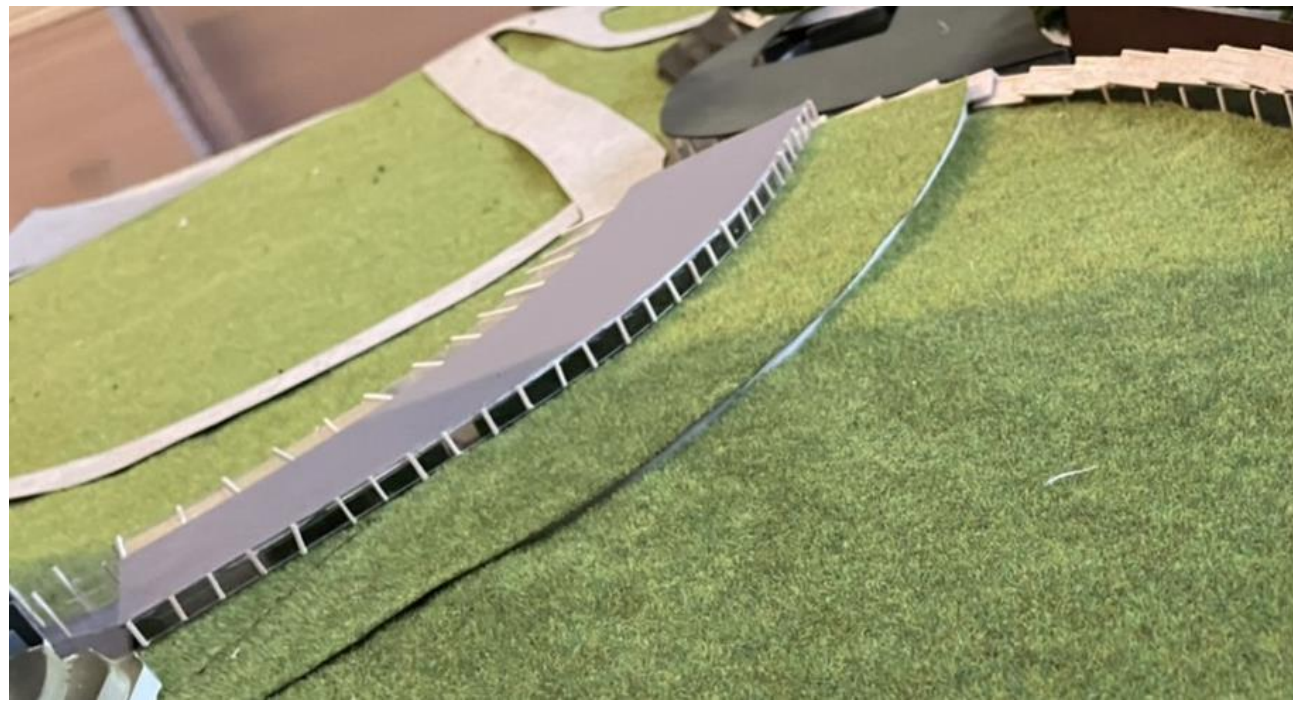
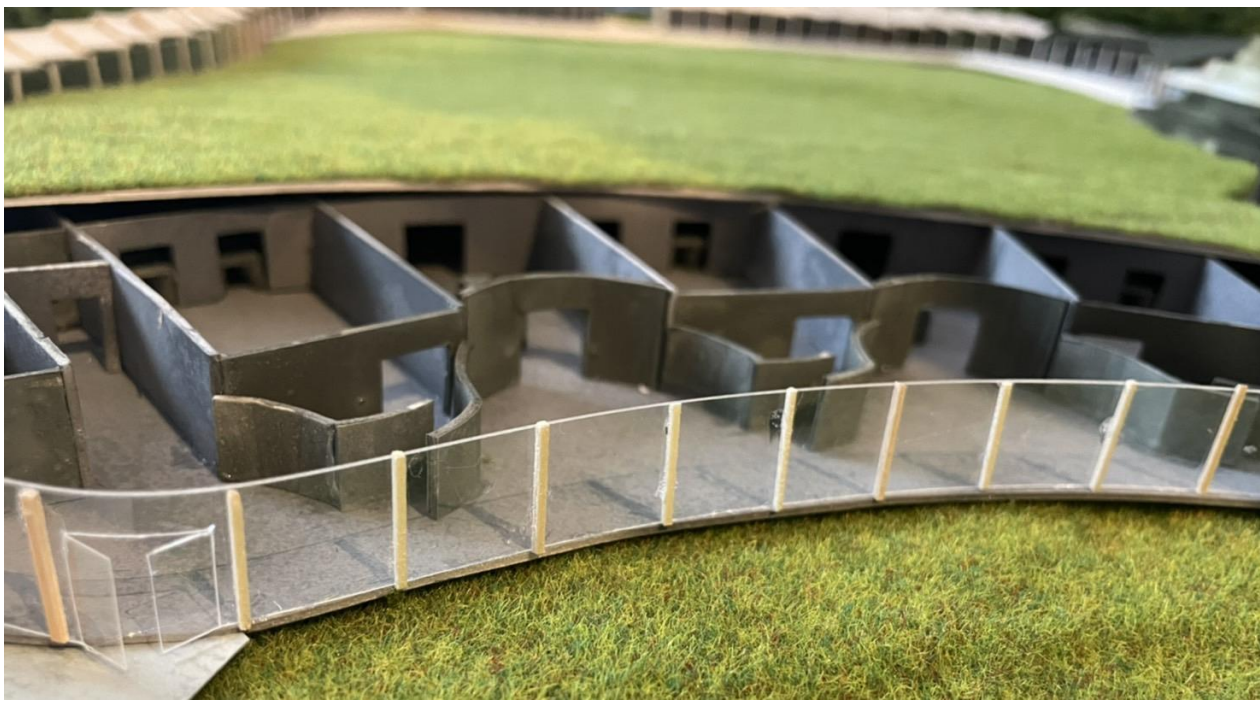


FF'断面図 1/200

サブエントランスを設け、複数の組の参列者が対面しないように。こちらのエントランスからも山に直接入り、暗いトンネルを抜ける。控室は様々な人数に対応できるように広さの違う部屋になっている。遺体や久しぶりに会う親戚等と一緒に過ごせる時間が増やせるよう、また、都会に出て久しぶりに帰ってきた人が泊まれるような、控室兼宿泊施設。テラスには木で目隠しをし、自然を感じながら公園型の墓を眺め、故人を偲ぶ。

山に埋まる差エントランス

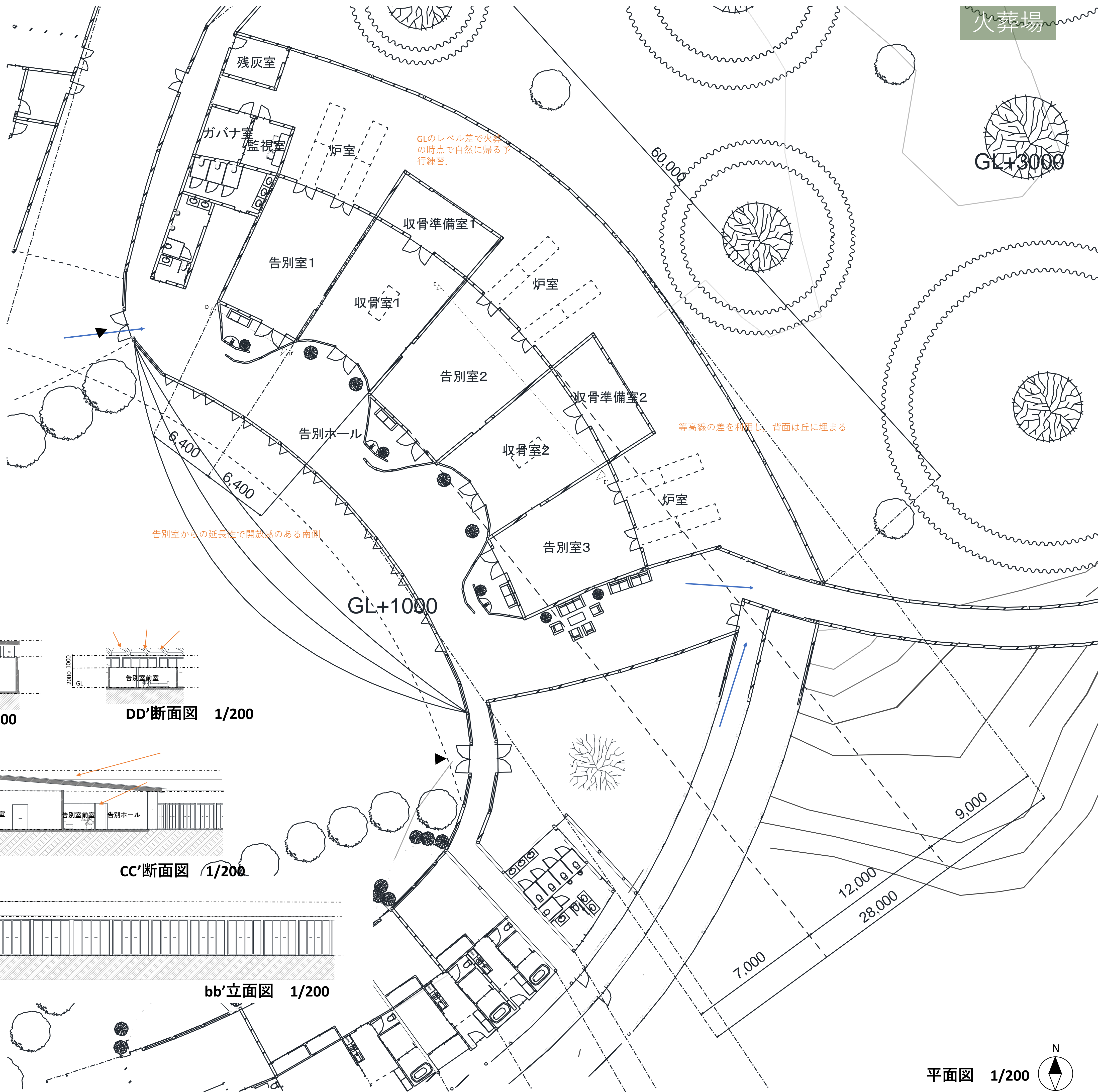
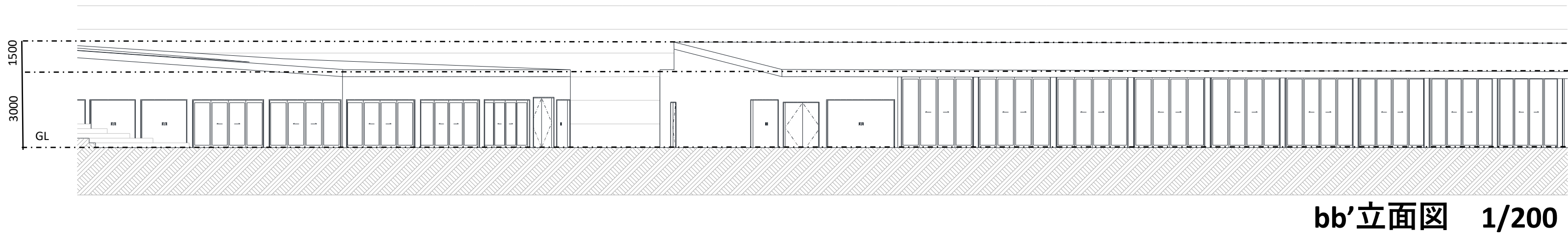
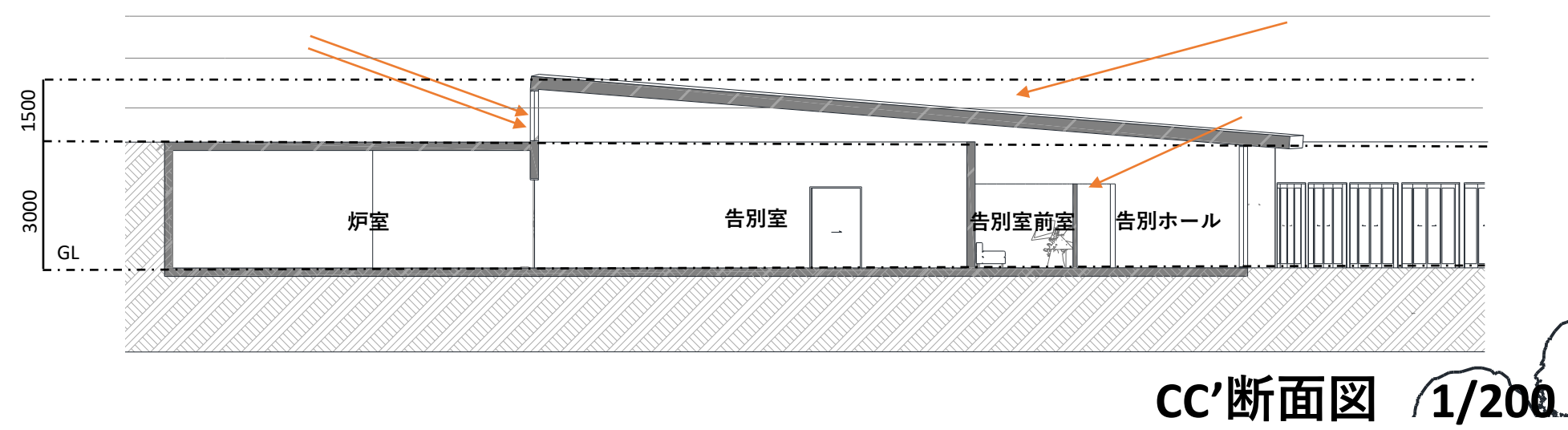
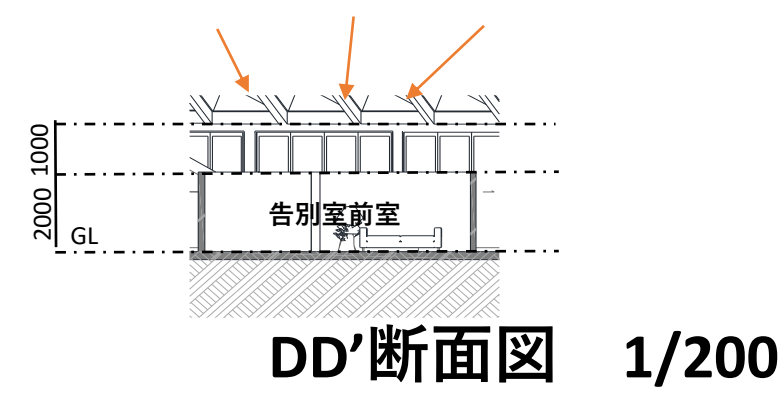
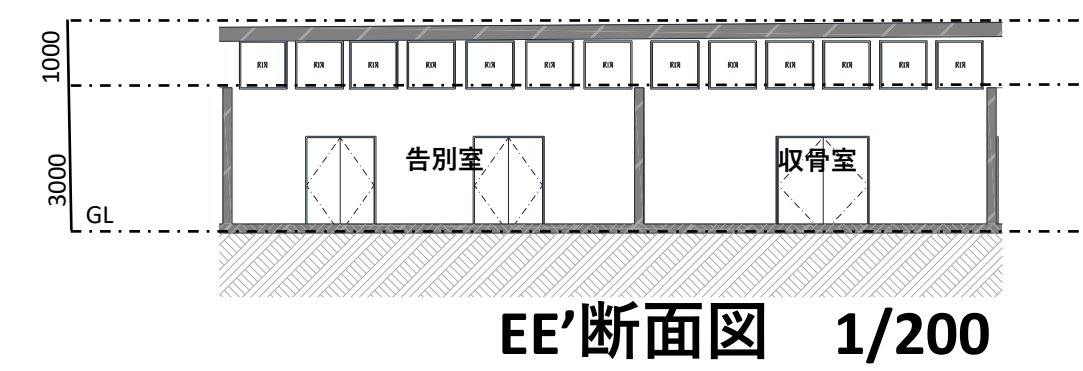




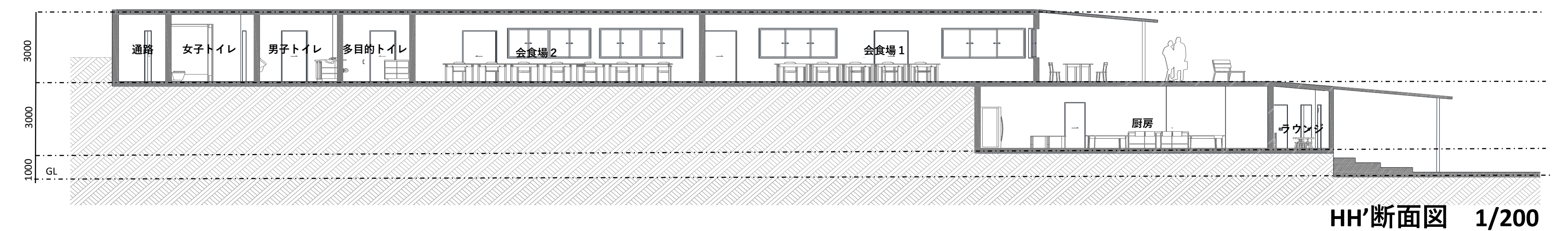
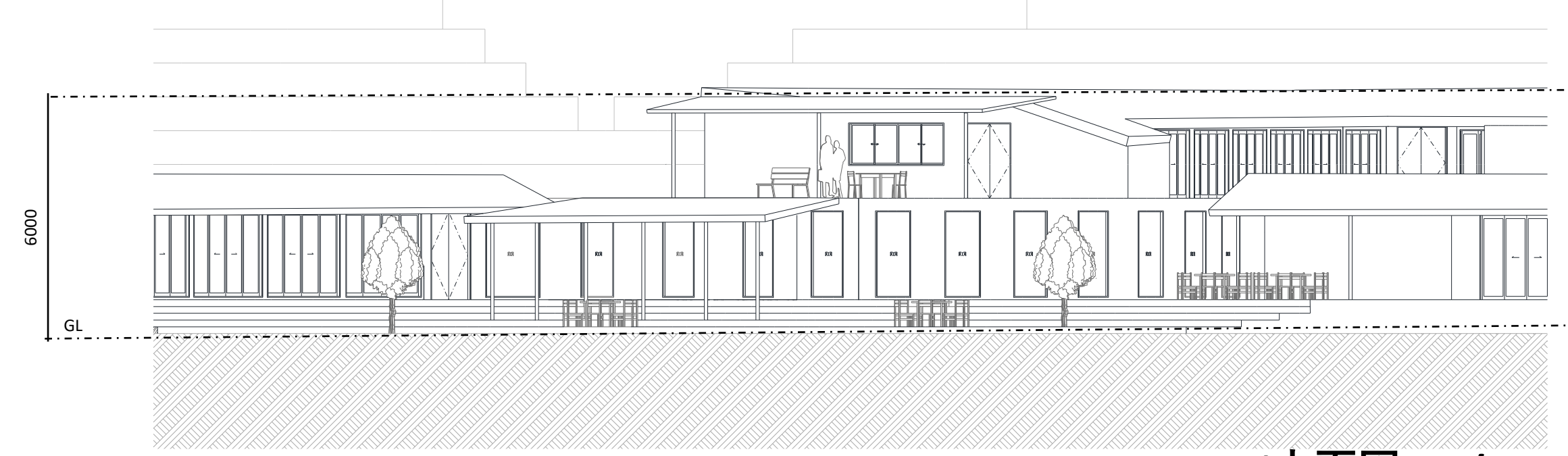
前室の前の壁は2m.

庭園型から火葬場に滑らかにつながる空間。

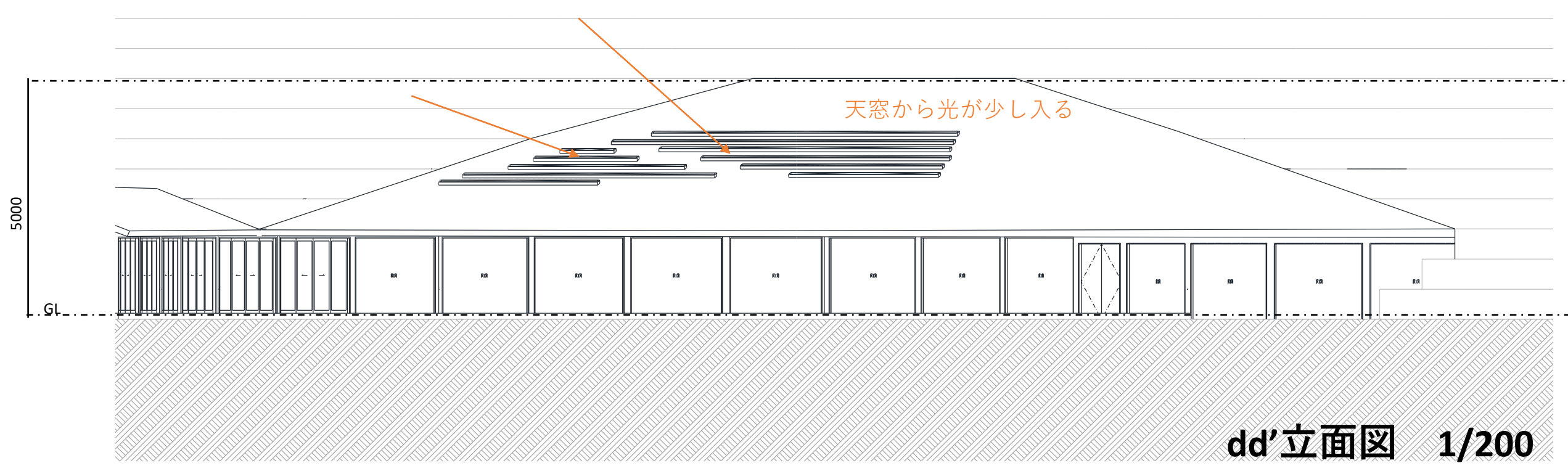
火葬場では大きな開口を設け、告別ホールを特に明るい空間とする。火葬を行うことは誰にとってもショックなことであるが、自然を感じながら、感傷、思い出に浸る。テラス側からは公園型の墓地の様子をうかがえて、故人や自身が一人ではないことが感じられる。告別室、収骨室の北側に窓を設け、また、告別ホール側の天窓からも光を取り入れる。上部から降り注ぐ光に照らされ、天に上る様子を想像する。壁に囲まれた庭園型。特に人目につかないような墓を望む人が穏やかに眠れるように。



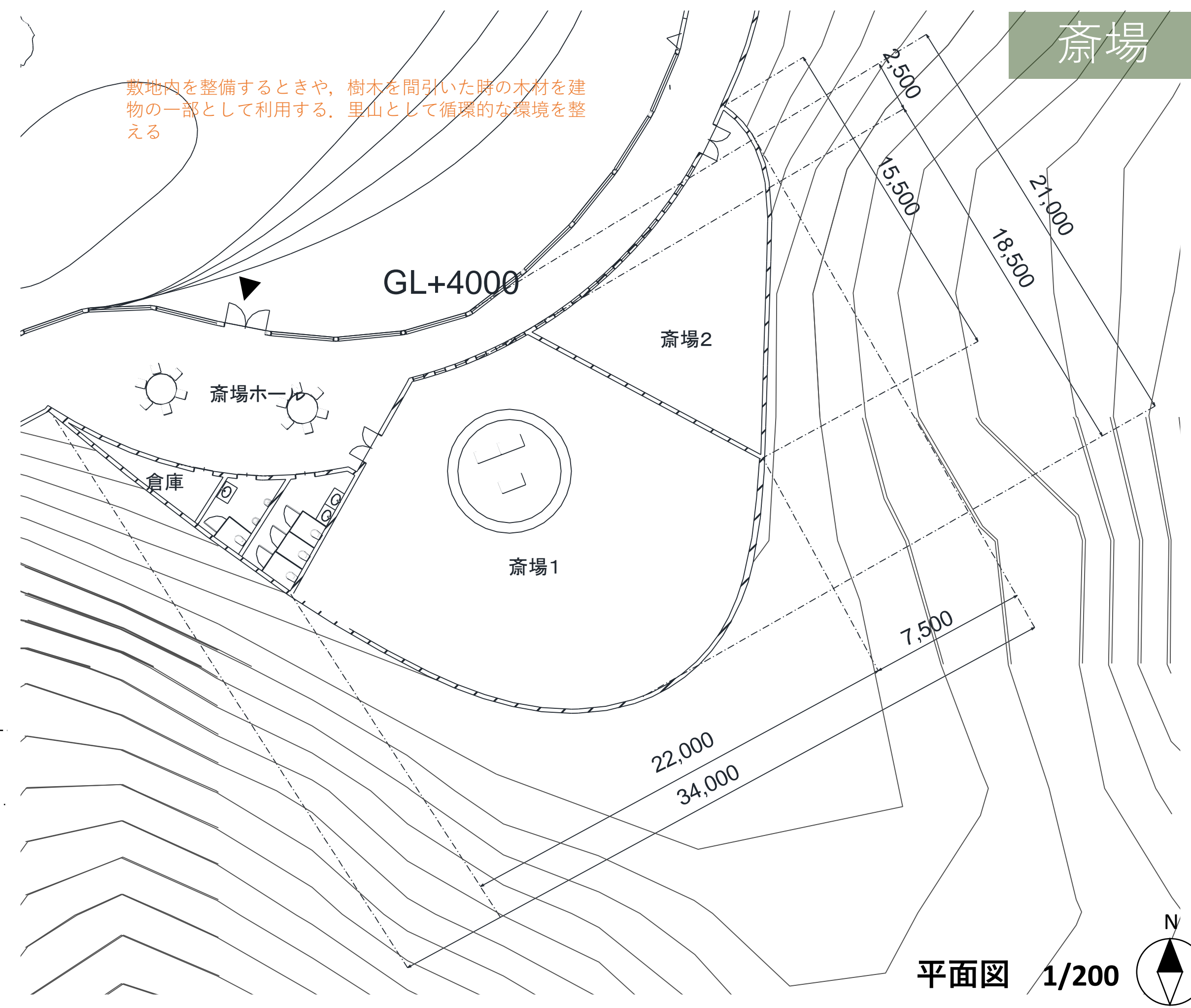
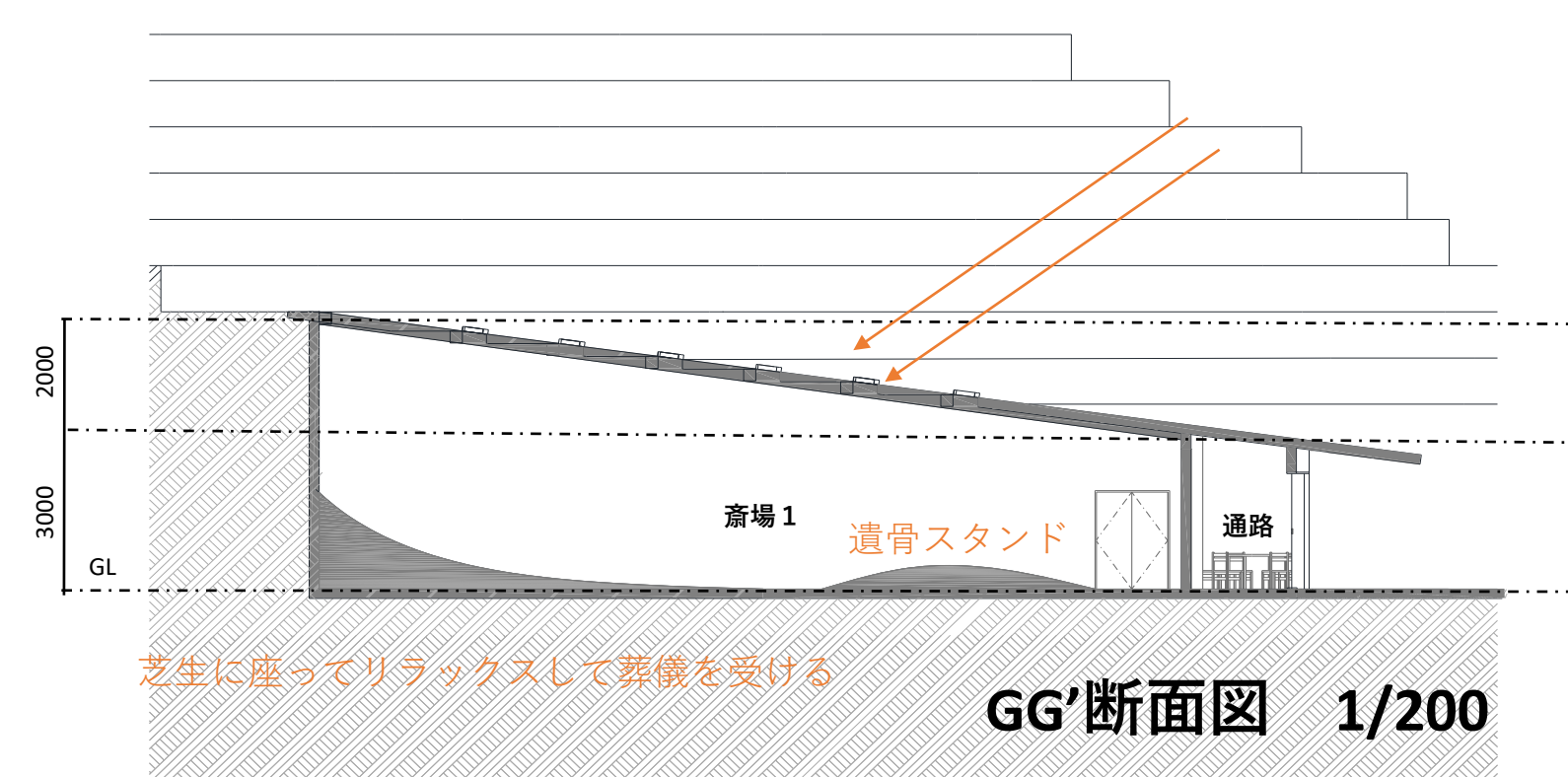
会食場～ラウンジ・カフェ



エントランスと同じように山の中で葬儀を行う。斎場の中でも山を感じられるように起伏を設ける。前方の丘に遺骨を置いて、みんなで囲む葬儀形態。芝に座り、自然と童心に帰る。天窓と前方から光が少し入り、木漏れ日のように明かりが入る。会食場に続く道は葬儀を終えた後は明るい通路となり、窓は折戸であるため天気の良い日は開放性のある通路となる。テラスの空間から墓まで滑らかにつながる。自然になじむよう等高線に沿った道のり。



開放感のある窓が連なる。自然と一体に。



斎場